

---

# 女系職場で上手くやっていく方法

宇礼シーナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女系職場で上手くやっていく方法

### 【Nコード】

N4466I

### 【作者名】

宇礼シーナ

### 【あらすじ】

大学は一応出たけれど、その後の就職に悩む若者の話です。別れた彼女、身勝手な女性上司、掴みどころない職場の先輩など……。そこへ一見よさげな転職話が舞い込んで来て……。さあ、どうしよう。どうする？

## 1・ニツクネームはフックン

### 1・ニツクネームはフックン

「フックンに似てるわね」

と、編集長の安西詩史あんざい ししぶみは言った。

穂芝尚人ほしほ なおとが、職場で新人りとして紹介されたときのことだ。

このとき尚人には“フックン”がなにを意味するのか分からなかった。

無理やりと言うか、咄嗟に“釣り針”を思い浮かべて、

「僕、そんなに（女を）引っ掛ける感じに見えますか」と、おちやらけてみた。

2

すると、なにやら呆れ顔をされて、

「やだ、あんた、フックン、知らないの？」

「はい……」

いきなり言われて、なんのことやら。

「布川よ、シブがき隊のお」

シブがき隊なら聞いたことはある。

向かいのデスクで仕事をしていた女の人がこっちを向いた。

「穂芝くんは二十四ですよ。少年隊でも知ってるかどうかなんですから、フックンは分からないでしょー」とフォローしてくれた。「

あなただと、トキオとか、ブイシックスよね」

なんだ、ジャーニーズの話か、と尚人はため息をつく。彼には興味のない世界だった。

「でも、フツクンは今でも居るじゃないの」と詩史編集長。

「そりゃ居ますけどー、シブがき隊が人気あったの、二十年以上前ですよ」

「だって、二十六のナツキーが知ってるんだから」ナツキーとはこの菜月恭子なつき きょうこのことだ。「この子だって」

会ったばかりなのに、この子呼ばわりされて、修業が足りない尚人は不快感をもろに顔に出した。

だが、編集長も菜月恭子も、尚人には一目もくれず言い合いをしている。

「わたしは、ジャーニーズには相当お金注いでますから。でも、詩史さんはフォーリーブスをリアルタイムで見ているんでしょ？」

「そこまで古くないわよお。郷ひろみ世代よ、わたしは」

「でもブルドッグ、歌えるじゃないですか」

「小さいときに聞いて覚えてるの」

「ブルドッグだったら、確かキンキッズも最近歌ったらしい……」  
と、横合いから言ったのは尚人だったが、その声は無常にも掻き消された。

「ちょっと現実を見る目、歪んでますよー、詩史さんは。穂芝くんはフツクンほどじゃありません。あえて言うなら、嵐の相葉です」

嵐の相葉ならわかる。でも、なんか面白くない。

またしても気分が顔に出て、尚人の口元がとがった。

その表情を、ようやく編集長が見た。

眉を寄せ、吟味する目でジロジロ眺められた。

「やっぱり、フツクンよ」

編集長が決めつけると、菜月がすかさず、

「男に甘いんだから」

と、聞こえるように、ぼそっと毒づいた。

そのとき、尚人は目を丸くした。

ほとんど、女子高生の会話じゃないか。どういう職場だ、ここは。

ただ、ひたすら呆れ返り、黙ってやり過ごしたのがいけなかったようだ。

おかげで、おとなしく扱いやすい坊やだと、なめられてしまったのかも知れない。

「編集長、電話です」と声をかけられ、我に返った編集長は、「じやあね、フツクン。今日はとりあえず、ナツキーの仕事手伝って。今夜、歓迎会するから。よろしく」と伝えて、さっと居なくなった。

茫然と突っ立っていると、今度はナツキーが、

「ちよっと、穂芝くん。今から手伝って欲しいこと言うから、ここにきて座って」

こうしてなんの断りもなく、会社における穂芝尚人のあだ名は、フツクンと決定したのだった。

当初異論をはさんでいたナツキーも、翌日からは編集長に従っていた。

もっとも、尚人も内心では編集長のことをシフミと呼ぶことにはしたが、それはせめてもの彼の小さな抵抗だった。

## 2・シフミの要求(1)

### 2・シフミの要求

それから一ヶ月ほど経った日曜の朝のこと。

尚人は携帯電話の着信音に起こされた。

「フツクン、いい話があるのよ。今すぐ、こっちに来ない？」

自分の用件をさっさと告げる詩史しひみだった。声が弾んでいる。

こんなときは、あちらには良いが、こちらには良くない何事かを要求するときと決まっている。

「へんしゅーちょー、きょう、日曜ですよ」

「分かってるわよ」そんなこと、と云わんばかりのニュアンス。「フツクン、日曜と一緒に過ごす彼女、いないでしょ？ だから、彼女を紹介しようってんじゃないの。そんじょそらの女の子と違うわよ。香港娘よ。しかも十八歳。たぶんだけど身持ちは堅いはず。そうは言っても恋が芽生えちゃったら、そこから先はご自由に……」

尚人は一瞬黙り込んだ。

今までの経験から、詩史の『すぐ来て』系の要求　　というか指図で、いい目にあつたことなどないのだから。

しかし、香港の女の子がどうしたって……？

「香港人って、言葉は英語でいいんですか？　中国語、無理だし。二・八才、ぐらい。英語も駅前留学を始めてすぐ挫折した口ですけ

ど」

そう質問した時点で、尚人の負けは決まったも同然だった。

またしても巻き込まれてしまったのだ。尚人の上司の安西詩史の要求に。

そして、尚人に対して実にミイハーなあだ名をつけたこの人が、はたして尚人の名を『穂芝尚人』と認識しているのかさえ不安だった。

もしかして編集長の中では、尚人の顔イコール・フックンなのではないだろうか。

こうやって定職について生活がやや安定してきたとはいえ、尚人は本来の仕事とは別のところ　納得できないあだ名や休日の呼び出し　で悩んでいることを、電車を二つ乗り継いでいる間に気付くのだった。

さて香港娘の全容は、詩史のマンションに近づいたあたりで分かった。

二人して駐車場の入り口に立っていた。

少女は意外や背が高かった。詩史より頭一つ分、突き抜けている。だが、もっともって彼女を目立たせているものがあった。

それは恰好で　彼女は原宿で見掛けるような、お姫様ファッションで身を包んでいた。

接近するにつれて明らかになった、もう一つの事実がある。意外や美人の部類だった。だが、美人であっても愛想はなさそう



だ。

なんだか面倒なことが待っていきそうな気がする。

いままで詩史が持ち込んだ「いい話」が、本当に良かったためではない。

それなのに、なんで言うこと聞いちゃうんだろう、僕のバカ！

詩史がマイカーの運転席のドアを開けて待っていた。

尚人は暗い顔して運転席に乗り込んだ。

詩史はさっさと助手席に香港娘を押し込み、

「フツクン、自己紹介は適当にやってね。夕飯までに戻ってくればいいから」

満面笑顔でそう言うと、ボタンとドアを閉めて、早く行けとばかりに手を振った。

香港娘は百八センチはあるだろう。

胸もでかいが、助手席へ乗り込んで来るときに見た尻の存在感。

これには負けると思った。

その大きさに圧倒され、少女とは呼び難いと思いつつも、それでもこの子を放って置くわけにはいかない。

「二一八才と声をかけようと思ったが、

「ナイス・トウ・ミーチュー」と、取り敢えず言ってみた。

相手はぎこちない笑顔を向けて、

「ミー・トウ、フツクン。コール・ミー・リーファイ」と答えた。

リーファイ（立慧）という名らしい。

「えーと、マイネームイズ・ナオト。ノット・フックン……だからね」

「バット・シフミ、コール・ユー・フックン」

英語で説明するなんてムリッぽ……。だから尚人は渋々、

「オーケー、コール・ミー・フックン、でいいや」と呟いた。

リーファイに何処に行きたいか訊くと、

「ヤング、イツパイ」と答えた。

イツパイは覚えて来たらしい。

### 3・シフミの要求(2)

それで尚人は、ブティックが集中している繁華街に連れて行った。途中、ゲームセンターで見つけたプリクラが気に入ったのか、写真に写るのに付き合わされた。

どちらかといえば、原宿に似合いのリーフィの姿に、道行く人たちが振り返った。

なんだか、売り出し中のタレントに付き添うマネージャーと思われるてやしないだろうか、僕……と余計な心配などしてみる。

リーフィは布製の赤い財布を握り締め、しっかりと計算しながら買い物した。

尚人は行きがかり上、仕方なく日本の土産にとドラエモンの縫いぐるみをプレゼントした。

愛想笑いらしきものを浮かべたリーフィは、  
「サンキュー、フツクン」と言った。

詩史のマンションに戻ったのは、五時過ぎだった。

「あら、もう帰ってきたの」  
と明らかに失望されたが、仕方ないじゃないか。

身長百七十センチそこそこの尚人が、リーフィを見上げて、なおかつ無理な英語力を絞りに絞って、お相手を務められるのは三時間が限度なんだから。

でも、「すいません」と不本意ながら謝った自分が嫌だった。

詩史は肩をすくめて、

「ま、いいわ。ちよっと早いけど、ご飯食べに行きましょう」

行った先は、ちよっと大きめの中華料理屋だった。

尚人が詩史の呼び出しに応じたのは、香港娘という誘惑以外に、こつした食事の見返りがあるからだ。

詩史は気前がいい。

メニューを見るとタガが外れて、テーブルの上を美味しそうな皿で一杯にしないと気が済まなくなる。

普段は食べられないフカヒレスープや北京ダックを食べ、あんかけチャーハンに舌鼓を打つ頃には、尚人の機嫌はかなり回復していた。

家でお茶でもと誘われ、マンションに戻った。

リーフィはすぐに宛がわれた部屋に籠った。

リビングで二人だけになると詩史が、

「あの子、可愛くない！」とぼやき出した。

聞けば、リーフィは詩史の大学の先輩が結婚した、中国人の連れ子なのだという。

日本に遊びに行くから面倒を見てやってくれ、と頼まれたのだそう。

「十五年も顔見てないのに、いきなりよ。面倒見させるなら、滞在費として幾らかわたしに払うのが当たり前でしょ？」

ところがあの子、自分が買物するときしか、お金出さないのよ。

それで、家にある食べ物、当然のような顔して勝手に食べまくって。

シャワーは毎日盛大に使うし、パソコン貸してやったらネットでお買物までするんだから。まったく、あの親はなに考えてんだか」

詩史の長い怒りの言葉が途切れたところを見計らって、合いの手を入れる。

「引き受けるときに滞在費のことなんか、ちゃんと話さなかったんですか？」

「言わなくなつて、常識で考えれば滞在費を持たせると思っじやない。それなのに、お土産ひとつ持ってこないんだから」

「一応、今からでも言ってみたらどうですか」

「言えたら、苦労しないわよ」

詩史は子供っぽい、ふくれっ面を見せた。

いつだったかナツキーが、

「詩史さんは、頼まれたら断れない姉御肌」

と言ったことがあるが、要は外面そとづらがいいってことだろう。

そのツケをこっちに回さないで欲しい、と心の中で文句を言っていたら、詩史がパツと目を上げた。

「そつだ、フツクン、言ってくれない？ 『第三者から見ても大変な迷惑行為だと思ふ。きちんとすべきです』 って言つてよお」

「そんな、言えるわけじゃないですよ、全然知らない人じゃないですか。それに編集長の先輩なら、ものすごく年上でしょ。僕みたいな若造が偉そうなこと言つたら怒られますよ」

「ものすごくは、余計よ」詩史は唇をとがらせた。

『そこに喰い付くの?』と尚人は少々驚いた。

詩史は三十四で、尚人は二十四だ。ものすごく年上には違いないのだ。

「あーあ、もう。あの子、あと一ヶ月はいるのよ。せっかく来たのに、富士山にも京都にも秋葉原にも行かないのよ。信じられない。それで、こっちが言わない限り、外に出ないんだから。せっかくのお休みに、あんなのに居座られたら、こっちがなんにも出来なくなっちゃう」

「あの、お姫様スタイルはどこで?」

「だから、インターネットよ。『便利便利、これ欲しかったの』…  
…みたいなこと言っちゃって」

### 3 シフミの要求(2) (後書き)

携帯電話からの読者様もおられますので、改行が多めになっております。

ご理解いたします m ( ) m

#### 4・シフミの要求(3)

だから、僕を使ったってわけだ。

ムカついた尚人は不機嫌全開で、

「もう、帰っていいですか」と言った。

「そうねえ、泊まればって言いたいところだけど、明日は会社だもん。着る物困るよね。それにさ、一線越えちゃっても困るよね、わたしたち」

ソファーにだらしなく伸びた詩史は、首だけこちらに向けてニヤツと笑った。

「編集長、そういうジョーク止めてくださいってば。それ、セクハラですよ」

「フツクンにセクハラするの、好きなんだもん」

まったく、いくら彼女のいない二十四歳の僕でも、アイロンを掛けてないのがありありとわかるノースリーブシャツと短パンというスタイルで、でれっとソファーに寝っ転がっている人使いの荒い女が相手じゃ、やる気になんかなるわけないよ。

そう思って尚人が振り返ったら、詩史のシャツの肩がずり落ちて左肩が大きく露出し、胸のふくらみが見えるほどになっていて、思わずコケそうになった。

しかも手の平サイズの柄の付いたローラーで、片頬づつコロコロとじごいっているし……。



例え、張り出した胸元を引き合いに出しても、色気があるような、ないような。ビミョウだし……。

尚人にフツクンとあだ名を付けた詩史は、じゃあ誰に似てるだろうと思つて斜めから顔を見やった。

あれっ……内田有紀に見えなくもないぞ、と思つた。

CMみたいに、『大丈夫ですか？』と訊ねたら、ちょっとだけハスキーな声で、

「大丈夫よ」なんて返してきたりして……。

「なにが大丈夫なの？」

「え？ あ、いえ」

……やばい、やばい。

「泊まっていけるってこと？ いいわよ、ベッドひとつしかないけど」

「へ、へんしゅくちよ〜」

「あら、変な子ね」

「帰りますからね」

と、ばしつと言つて玄関に向かった。

詩史は後ろを付いて来ながら、

「リーファイ、フツクン・イズ・ゴーイングホームよ。セイ・グツバ  
イ！」

と怒鳴つた。

リーファイが部屋から顔だけ出した。  
「グッバイ、フックン」

詩史はというと、

「ご苦労さん」

と投げキスを送ってよこした。

「ご苦労さん……か。」

そりゃ、詩史はずっと年上で会社の上司だ。

しかし社用ではなく、プライベートの用事で使い回されたのだ。  
『ありがとう』と言うべきだと思う。

僕をなんだと思ってるんだ。

おとなしく言うことを聞くからって、甘く見やがって。

尚人は帰る道々、どんどん腹が立ってきた。

いつもこうなのだ。

目の前でまくし立てられると、言いなりにならざるを得ない。

なんでこんな目に遭うんだという憤慨は、後になって出てくる。

詩史の前に出ると、臆病な捨て犬みたいに尻尾を丸める自分が情けない。

こんな状況が続けていたら、自分は将来ダメになるんじゃないだろうかと思った。

医薬品の業界誌の仕事なんて、やりたくてやっている訳じゃない。

尚人は中学の頃から漫画家志望で、大学へは行ったけれど、やっ

ぱり夢は捨てられず、某漫画家の所でバイトをしていたことがあった。

一年ちよつと下働きして、皆とも仲良くなったので、『卒業したら、うちに来いよ』と誘ってくれるのを期待していた。

ところが、ようやくその頃になってみると、人は増やせないと言われた。

バイトでいいなら引き続き来てもいいよと言われて、卒業後も一年ほど続けたっけ。

しかし、友人たちが皆それなりに就職している中で、一人だけ学生時代と同じバイトの身の上というのはきつかった。

備品の買い物などで外へ出たりしたとき、スーツ姿の同年輩のサラリーマンを見ると、ジーンズにTシャツで、お茶を入れたり、なんとか背景を塗らせてもらったりの、単純作業をしている自分がいかに落ちこぼれのように、顔を上げられなかった。

そればかりか、当時付き合っていた彼女にも、  
「尚くん、やりたいことってないの？」

と、軽蔑したように言われたことがあって、深く傷ついた。

## 5・シフミの要求(4)

「漫画家になるのが尚くんの本当の夢だったら、今がどんなにうまくても胸を張れると思う。でも、このごろの尚くん、目つきが卑屈だよ。ああいうちょっと華やかな世界にこだわるのも、目立ちたがりの子供みたいだし。」

うちの会社はビルや住宅の下水管の交換や清掃で成り立っているの。男も女も作業着とかエプロンして、いろんなところに出かけていって毎日掃除とかしてる。

決して格好いい仕事じゃないわ。でも、売り上げ伸ばすために皆で頑張っていると、前に進んでるって実感があるよ。

そういう目で見ると尚くん、毎日同じところで足踏みしているだけみたい」

ここまで言われても返す言葉のない尚人に焦れたのか、彼女はついに宣言した。

「わたしたち、しばらく会わないほうがいいと思う。会つとわたし、こんなふうに尚くんにキツイこと言っちゃうから……」

尚人は黙って、うつむくだけだった。

同世代の男として情けなかった。

下働きをしている間に分かったことがある。

漫画家の予備軍というのはゴロゴロいて、そのほとんどが食えずにフリーターをしたり、親のすねかじりしている。

そこから這い上がって一人前になれるのは、百人に一人かも知れ

ないし、千人に一人かも知れない。  
頑張ればなんとかなる世界ではない。

そんな実態が見えて来て、漫画家を目指すことが本当に自分の夢なのかどうか、自信がなくなった。

中学時代から雑誌や放送局宛にイラストを書いて投稿していた。漫画家って儲かりそうだし、有名人と付き合えるかも知れない。そういう下心も確かにあった。

それを『目立ちたがりの子供みたい』と言われると、ぐうの音も出ない。

もう考え直すべきなのかもしれない。

そんな焦りが読めたのか、今までフリーターを続けることに口出ししなかった親が、

「おまえにその気があるなら、就職先を紹介する」と言い出した。

その会社の重役が尚人の父親と知り合いで、それとなく相談してもらった。

「女性が上司になるが、それでよければ」という誘いだった。

溺れる者は藁をも掴む。

そんな程度で就職を決めた。

女が上司であることに、こだわりはない。

安西詩史は仕事ができる。それはよくわかる。

頭がよく、責任感が強く、必ず結果を出す。

仕事の手腕を考えれば、彼女が上司であることになんの異論もな

い。

だが、部下は友達ではない。  
杯を交わした子分でもない。  
自分の思いどおりにしないで欲しい。

フツクンと呼び名を決められたことは、まあ、いい。  
与えられる仕事、膨大なデータをグラフ化したり、決められた  
フォーマットにインプットしたりの単純作業であることも仕方がな  
い。

新人なんだから。

だが、詩史の私用に使われるのは心外だった。

詩史は会社の仕事以外に、アルバイト的にいろいろやっている節  
があり、会社関連ではない人の訪問や電話が頻発して、しょっちゆ  
う外に出ている。

その豊富な人脈が、インタビューなどに応じる人の確保が生命線  
であるため、そうした行動も会社は黙認しているようだ。

そのせいか詩史の公私混同は極まり、オンとオフの線引きがまる  
でない。

仕事であれプライベートであれ、出会った人間は即ファミリイ化  
して、つるんで飲み食いしたり、旅行したりしては泥沼の不倫劇だ  
の、過去のセックス体験の比べっこだの、あけすけな打ち明け話を  
交換し合う。

そのせいで仲間意識も高まるのだが、詩史ほど何もかも喋る女は  
いない、というのが共通の認識だ。

詩史の男遍歴は、みんなが知っている。

今、誰とどうなっているかもだ。詩史に秘密はないのだ。

別名“私生活のない女”なのだと、ナツキーが言っていた。

ナツキーは詩史にスカウトされて入社して以来、ほとんど秘書の  
ような役割を果たしていた。

本人は妹分を自称しており、そのせいで職場でも、「編集長」で  
はなく「詩史さん」と呼んでタメ口をきいても、誰にも咎められる  
ことはない。

## 6・ナツキーこと菜月恭子(1)

### 3・ナツキーこと菜月恭子

ある時こんなことがあった。

机上の電話がリーンと鳴って、彼女が受話器をとった。

「恭子さん？」

と、いきなり男の声。

大きな声だったし、席が近いこともあって、そこだけは尚人にも聞こえた。

相手はつづけて話しているようだが、ナツキーは困惑を隠せぬ表情だ。

「でもお兄さん、それはいくらなんでも。あんな所から二人で出て来て、それはないでしょう」

とナツキーが言つて、また暫らく相手が話している。

「はい、そういうことしておきましょうか」

と、ナツキーが皮肉の混じらぬでもない声でそう言った。

そして暫らくおいて、

「ちょ、ちよつと待つて」とナツキー。「それはないわ。それじゃまるで脅迫じゃないですか。わたしの方は無関係なんです、無関係まったく何にもないんだから……あれは、うちの会社の後輩です！  
一人が酔い潰れたんです。その人をあの部屋で介抱して……」

受話器を置いたナツキーが職場を見渡し、心配げに見る同僚たち



に、  
「たいしたことじゃないの」と言った。

その後、尚人だけを連れ出して、廊下の隅で話した内容は次のようなものだった。

電話の相手は、結婚して何年も経つお姉さんの旦那だったらしい。そもそも話というのが前夜に起因することだった。それには尚人も大いに関係していた。

前夜、尚人たちが乗った電車が新宿駅に着いたとき、学生たちの一団が賑やかに乗り込んできた。

ドアが閉まり、酔いつぶれた女子学生二人を、他の学生たちが座席に座らせる。

その様子を、尚人たちは少し離れた所で見ていた。

その少し前。

新人　といっても尚人より年上　の営業が急ピッチに酔いがまわり、飲み屋のテーブルに顔を伏せて寝込んでしまった。

「しょうがない奴ねえ」と、上司である編集長の詩史は言ったが、「あとは頼んだわね」と言い残して先に帰った。

「この人、昨夜は客の付き合いマージャンで、一睡もしてないらしいですよ」

と、尚人が同情を声に滲ませた。

時間は十一時に近かった。

なんとなく残業でオフィスに居残った四人が、帰りがけにちよつと

一杯やっていこうか、といった結果がこれなのである。

どうしたものと二人で相談をした。

タクシーに押しこみ、運転手に行き先を教えて送り出すという手もあるが、彼の住まいは横浜のまだ先である。

タクシ - 代もバカにならない。

電車の車両にブレーキ音が響いたとき、

「まだだよ、まだ！」と例の学生たちが、また騒いだ。

顔色が真っ白になった女学生の一人が、窓枠に手をかけながら立ち上がった。

「まだ着いてないから」

とまわりの学生たちが、その子の両脇に手を入れて座らせようとした。

「やあだ」と、ナツキーが非難めいた口ぶりで見ている。

その女学生のシャツは首のところまで捲れ上がり、ブラもはずれて薄いピンク色に染まった乳房の上に乗っていた。

上半身が裸になってしまった彼女は、そのことにはまったく気付かずに背もたれに寄りかかって寝ている。

恭子が動いて一言批難しようとしたとき、もう一人の女学生が状況に気付いて友達のブラを直し、シャツをおろした。

電車は次の駅に近付いていた。

「近くのホテルへ泊めた方が、まだ安上がりですね」

と、尚人は自分の頬を手の甲で撫でながら言った。

「近くのホテルといっても、高いんじゃないかしら」  
「ラブホでいいですよ。その方が料金安いから」

## 7・ナツキーこと菜月恭子(2)

電車を降りた。

前後不覚に酔いつぶれている営業部員を、それぞれ両脇から抱えて駅近くのラブホテルへ。

「お三人さんでは、ちよつとー」

と、フロントのおばさんに変な勘繰りをされる一幕があったが、泊まりは一人なのだと言得して、ようやく鍵を手にした。

なにやら怪しく、手のこんだ部屋へ酔いつぶれている男を運びこみ、上着を脱がせ、とにかく布団の中へと横たわらせた。

ほつと一息つき、

「折角だからお茶でも」

と、ナツキーがポットの湯を注ぐあいだ、沈黙が……。なんとなく、むず痒いようなバツの悪さが……。

熱いお茶で口をちよつと湿らせただけで、

「まだ終電に間に合うから、我々も帰りましょう」と、尚人がそわそわと腰を上げた。

二つ年上のナツキーも、それには異論がないようだった。

ドアを開け、廊下へ出た。

その時、向かい側の部屋から二人連れが出て来た。

後ろ暗いことをしたわけでもないのに、なぜか瞬間にナツキーが目を逸らせたのがわかった。

だが、やはりチラリと振り返る。

その拍子に向こうの男と目が合って……。

その男がナツキーの義理の兄なのだそうだ。  
若い女連れだった。

電話で向こうがどんな言い訳をしたところで、ラブホテルから若い女と出て来たところを目撃したからには、言い逃れできないではないか。

それを、『そんな目的で居たわけではないから、余計なことを言いふらさないで欲しい』と言われたのだそうだ。

それどころか仕舞いには、

『恭子だって男と部屋から出てきたじゃないか』

と、まるで互いの秘密を共有するかのようには迫られたとか。

「まったく冗談じゃないわ」とナツキーは怒った。「向こうは妻子持ちよ。姉のことをどう思ってるのかしら」と、ブンブンだ。

尚人はそれを聞きながら、向こうさんにはナツキーと肉体関係がある男として見られたことが複雑だった。

その後、ナツキーがこの一連の出来事を、お姉さんに話したかどうかまでは分からない。

もうひとつエピソードがある。

ナツキーこと菜月恭子と、二人だけで東北の某所まで日帰りで行ったことがあった。もちろん仕事で。

実はその帰り道も、すんなりとはいかなかった。

乗り合わせた列車が、先行列車の事故のために駅で立ち往生となったのだ。

真夜中の車内は尚人たち以外にも数人散見されたが、時間が経つにつれ人影がなくなっていくことに気付いた。

窓の外を見ると、ホームの向こうに派手なネオンサインで“HOTEL”の文字が。

「フツクン、わたし泊まるから」

時間が十二時を回ろうとしていたし、その言葉の中には『一人で』の三文字が含まれていることは明らかだった。

会社には、遅くなったから直帰すると、すでに伝えてあった。

「はい、じゃあ僕は此処で」

夜を明かしますからと、尚人は列車の席に横向きになった。

女性が車内で夜を明かすのは耐えられないのだろうと思った。

しかも明日も仕事なのだから。

手荷物を抱えたナツキーは、暫しネオンサインを見詰めていたが、急に尚人の方に向き直って、

「変なこと考えないですよ？」と言った。

変なことではないが、目の前の二つ年上の女を見詰めながら、尚人は考えた。

あのホテルは男女で利用するタイプのものだ。

女がこの時間一人で入って行って、泊めてもらえるとは限らないだろう。

小難しい遣り取りをしている時間などなかった。二人でホテルへ急いだ。

## 8・ナツキーこと菜月恭子(3)

寂れたような駅の界隈に、幾つも営業している宿があるとは思えない。

尚人たちより先に列車を降りた人たちだって、そこを目指して行った筈だ。

案の定、部屋は残りひとつだった。

ひとつでも残っていたことに感謝したい気持ちだった。

それはナツキーの安堵した顔付きでもわかった。

「いいわよ。もともと二部屋とるつもりもなかったでしょう？」

ナツキーは当然の如くに、尚人に向かって言った。

「そうなんですか？」

「そうよ。だって不可抗力の事態とはいえ、今どき二部屋分、経理がOKすると思う？」

尚人はぼつと口を半開きにしたまま、相手の言葉を待った。

「無理だと思うわ。フツクンは泊まらなかったことにしなよ」

「え？ じゃあ」

「もちろん、泊まるのよ。わたしもそこまで鬼じゃないわよ」

「でも会社には、ばれると思いますけど」

「大丈夫。わたしが何とかするわ」

自分に言いきかすように聞こえたが、詩史編集長の秘書を自任するくらいだから、本当になんとかしそくに聞こえた。

こうしてその夜は、四畳半ぐらいの部屋に先輩の女と後輩の男が共に泊まることになった。

最初、ナツキーがシャワーを浴び、交代して尚人が浴びて出て来るところまでは、まるで出張先の仕事の延長のような段取りだった。既にナツキーはベッドに潜り込んでいて、背中と言った。

「寝具もひとつだった……」

この当たり前の状況に、二人して頷いた。

「フツクン、こつち来てもいいけど、あんまり揺すらないで。寝られなくなるから」

相変わらず背中を向けていて、顔は見えなかった。

尚人も背中合わせに潜り込んだ。

ナツキーがもじもじと向こう側へ寄った。

大人二人だと膝を曲げていては、はみ出てしまう。

後輩はすまなそうに何か言ってから、ナツキーの背と腰にびつたりとついた。

目を閉じてみたが、尚人は緊張して眠れそうにないと思った……。

どれぐらいの時間が経ったのか。

尚人はナツキーがベッドを下りる動きで目を開けた。

やはり、この窮屈さを彼女の方が嫌ったのだと思った。

だが、腕時計を見て驚いた。

朝の四時過ぎだった。

尚人はあの直後にもう寝入っていたのだ。



ナツキーは向こうを向いて立ち、浴衣を開いて身支度を始めていた。

浴衣を落としたとき、ナツキーの裸の背中を初めて見た。

「もう行くんですか？」

「うん。いくらなんでも、家に帰って着替えぐらいしないと」

それを聞いて、尚人も慌てた。

大急ぎで身支度をした。

ホテルを出て、列車に乗った。

都内に入って電車を乗り継ぐまで、尚人はナツキーと話したが、たいして寝なかつたわりに眠気は来なかつた。

この時、ナツキーに聞いた話では、詩史は年下の男と付き合った経験も結構あるそうだ。

しかし大体、ものを売りつけられたり、小遣いをせびられたりの金銭目的で、本当の恋愛にはならなかつたらしい。

「それに詩史さん、ロマンチックなダメ男が好きだからね。最近居ないでしょ。ロマンチックなダメ男」

ナツキーは、尚人に当てつけるような目をして言った。

僕はロマンチックなダメ男だけどな、自慢じゃないけど。

尚人はそう思ったが、口には出さなかつた。

どうせ、

「ロマンチック抜き、ただのダメ男じゃない」  
と笑われるのが落ちだ。

だが、裸に近い女を目の前にして寝入ってしまった事実で、ナツ

キーの嘲笑を暫くは避けられそうもない。

それとも二度と相手にされないかの、どちらかだろう。

でも、ナツキーは口に毒がある。

歳が近いのに付き合う気になれないのは、そのせいだと、尚人は自分を納得させた。

## 9・シフミにかかると(1)

### 4・シフミにかかると

尚人にとって問題なのは、詩史しふみのほうだ。

詩史と知り合ったら最後、彼女の人生のすべてに関わることになる。

ナツキーはそれを楽しんでいるが、尚人は辟易していた。

入社以来、詩史の友人の引越しを手伝わされ、なぜかビデオムービーのエキストラをやらされた。

これもなぜか着物の着付け教室のモデルになったし、女ばかりのホームパーティーに出されてホスト役で十人以上の年増にお酌した。辞書を片手に懸賞応募原稿の下読みと校正をしたのは、まだ仕事らしい方だ。

「温泉に連れて行ってあげる」と言われ、

「いいですね」とお愛想を返したら、

「車、出して」と命じられ、

結局はドライバー役だったこともある。

「知り合っておくと役に立つ素晴らしい人がいるわ」

と言われて会つのを承諾すると、遠くにいるから「車、出して」と……。

行ってみると、相手は奥深い山中に棲む陶芸家で、山菜料理を食べながら呑んだくれただけで、知り合っただけからといってどんな役に立つのか、皆目見当がつかない。

要はこんなのばかりなわけだ。

詩史はペーパードライバーだから、友人に運転を禁じられているという。

尚人も、それには同感する。

だからといって、お抱え運転手扱いされては堪らない。

それでも素直に、

「頼むわね」

と女らしく言ってくればまだ許せるが、こっちの気を惹くようなことを言って誘い出す手口が癪にさわる。

策を弄するから、騙されたような気分になって鬱憤がたまるんだ。口惜しいから、用事を足したあとの奢りの食事はしっかり食べる。食べながら文句を言う。

「編集長、今日は疲れました」

「なに言ってるの、若いのに。わたしが二十代の頃は三日くらい徹夜しても平気だったわよ」

自分を基準にするな、と尚人は思い、

「編集長はモテるんでしょう。ほかにいないんですか、使える男」と皮肉ると、

「わたしのボーイフレンド、みんな年上でさ。腰が痛いのに、目が覚めないのー、狭心症の発作が出るのー言っちゃって、下手に用事頼んだら救急車呼ぶ羽目になりそうなのばかりなのよ。昔はみんな、頼もしかったのに」と言う。

「年下探せば、いいじゃないですか」

「そうしたいのは山々だけど、わたし、ファザコンだから、どーしても年上になっちゃうのよ」

ああ言えばこう言う。

ちっとも反省してくれない。

いつだったか、詩史の古い友人だという女性デザイナーを紹介された。

彼女は尚人を見て、意味ありげに笑った。

「あなたが、詩史さんの新しい彼？」

尚人は反射的に大きく両手を振って否定した。

すると、デザイナーはさらに意地悪げな笑みを広げて、こう警告した。

「詩史さんは見境ないから、気をつけてねー」

ブルブル……。詩史のタイプに、自分はハマっている。

尚人がそう言ったとナツキーに告げ口されたら、あの詩史のことだ、本腰を入れてセクハラに及ぶだろう。

そうしたら、生身の身体がうっかり応じかねない。

それが元でボーイフレンドにされてしまったら……。ああ、想像するのもオソロシイ。

年上の女は嫌いじゃないが、三十四は年上過ぎる。

それに、あんな忙せわしない女はイヤだ！

詩史は、常に自分のキャパシティを超えた用事を抱えて、ブンブんと蜂のように飛び回っている。

その勢いで腕からあふれた用件が、まわりにいる人間に降りかかってくるのだ。

そして、あたかも暴風雨に晒されるように引きずり回され、なぎ倒されて、エネルギーを吸い取られる。

かつて深い仲になった男が二人病死したそうさ。詩史は、

「わたしを捨てたバチが当たった」

と言っているが、詩史という存在そのものに当たったんじゃないかと、尚人は思った。

とにもかくにも、濃密な関係になるのはなんとか回避できるが、部下だというだけで干渉される毎日は避けようがない。

## 10・シフミにかかると(2)

その後またリーフイにつき合わされ、その疲れも取れないある日、昼食に出ようとすると会議室から出てきた詩史に呼び止められた。

「フツクン、会っておいたほうがいい人がいるから紹介する。来て」

またかよ。警戒警報が頭の中で鳴る。

だが、詩史は顔が広い いや、もちろん物理的にはなく。

今まで紹介された中には、名前を聞いたことのある評論家や、本を何冊も出しているという医事ライターや経営コンサルタントなど、会って話したと人に自慢できる人も確かにいた。

だから、そんなのいいですと断れない。

それに、なんてったって上司なんだ。

引き合わされたのは、生涯教育関係のプロデューサーという人物だった。

詩史が、尚人のことを漫画家志望だと教えると、

「じゃあ、絵コンテ作りなんか、頼もうかなあ」

と、ちよつと気になることを言った。

アルバイトでやっていいものか、詩史に話を向けると、

「うちの仕事に支障をきたさない程度なら、いいわよ」と、あっさり言う。

自分もアルバイトしまくりだからだろうが、尚人にとっては嬉しい提案だった。

そのあと三人でランチを食べた 支払いは、もちろん詩史がした。

詩史がトイレに立ったとき、その男に、  
「会社が終わったら事務所に来てほしい」と言われた。

ほいほい付いて行ってみたら、

「アメリカの大学の博士号がとれる方法があるから試さないか」と  
持ちかけられた。

「短い論文に五十万円を添えればいい」と言うのだ。

な、なんのことはない、如何いわしい商売の客にされたのだった。

尚人は驚いて逃げ帰り、詩史に抗議の電話をかけた。

すると詩史は、

「フツクン、あいつについてったの？ バカねえ」と呆れ返った。

「バカって、そんな！ 編集長が紹介したんじゃないですか」

「あれは向こうさんへの社交辞令よ。大体さ、生涯教育なんかプロデューサーっていう肩書きが怪しいじゃない。そうは思わなかった？ フツクンもてつきり調子を合わせてるだけだと思ってた。ときどき、わたし、こいつは食わせものだっていう目配せしてたでしょ。気がつかなかったの？ ダメねえ」

「だって、編集長が……」

「編集長が、編集長がって言うけど、だったら、あいつに誘われたときに、わたしに言えばよかったじゃない。そしたら、ちゃんと止めたわよ」

だって詩史さんが、

「会っておいたほうがいい人」と言った時点で信じてるから、と言  
い訳しようとしたが、その男の申し出を仲介者である詩史に知らせ



なかったのは軽率といえば軽率だった。

仕方なく引き下がったが、またしてもあとから怒りが湧いてきた。そんな危ない人物なら、最初から紹介なんかするなよ。

絵を描くなんて餌を投げられたら、食いつくよ。

クリエイティブな仕事にありつけなくて、腐ってるんだからな。人を罾のあるほうにけしかけておいて、気がつかないお前が悪いみたいな言い方するなんて酷過ぎるよ。

翌日出社すると、詩史は何にもなかったような顔で、ナツキと『ブルドッグ』を歌い踊っていた。

にっちもさっちもどうにも……ブルドッグっていうのは、今の僕の気持ちそのものじゃないか！

尚人の中で、我慢の糸がプチプチと大量に切れる音がした。

やってられない。

やってられるか！

「アアアア」尚人の脳内ジャングルで、ターザンが鳶を揺すって暴れまくった。

愚痴を言わずに黙って耐える　男とはそういうものだ、昔は云われていたそうさ。

そんな痩せ我慢をして、何かいいことがあったのだろうか。

## 11・漫画の鬼(1)

### 5・漫画の鬼

尚人は、詩史しふみによつてもたらされる不幸について愚痴りまくった。社内では言えないから、大学や漫画のバイト時代の友達にである。そうしたらなんと、転職の話が飛び込んできた。

それも一時は夢に掲げていた漫画家のアシスタントをしないかというのである。

話を持ってきたのは、茂手木洋司もてぎ ようじという漫画家のアシスタントだった。

この畠中はたなかとは顔見知り程度の仲だが、友人に事情を聞いたと電話してきたのだ。

自分が辞めるので後釜が必要なのだが、茂手木はすごく忙しいので、すぐに仕事を任せられる即戦力が欲しい。

きみは経験があるから、今なら推薦できるがどうかという。

茂手木に直接会ったことはないが、時事的な風刺絵もかける職人的な漫画家として重宝がられていた記憶がある。

アシスタント業が楽でないことはわかっているが、すぐに仕事を任されるという言葉に惹かれた。

なにより、詩史から逃げ出したかった。

私生活のない女に私生活を干渉される、この生活パターンを変えたかった。

土曜日、畠中に連絡すると、「できるだけ早く会いたい」という。尚人にも異論はないので、その日のうちに茂手木の仕事場に行っ

た。

住宅街の小綺麗な一軒家だった。

出窓のある書斎といった雰囲気のある部屋に通され、やたらと感心している畠中は、

「カッコいいだろう」と鼻をうごめかせた。「茂手木先生は、こだわりの人でね」

メモ用紙はアメリカ製の黄色のメモパッド。コーヒーは行きつけの店で挽いてもらうブラジルとモカをブレンドした茂手木スペシャル。

オーディオも高密度樹脂のホーンと、四十センチ近いウーファアのJBLというものだった。

「毎日、大体十一時出勤で、仕事始めの気合い入れに『帰ろかな』をかけると決まってるんだよね……」

サブちゃん？ しかも、午前中から『帰ろかな』って……。

「夜はそのときの気分でマイルス・デイビスだったり、フェリックス・メンデルスゾーンだったり」

「へえ」

なんのことだか殆んどわからないほど趣味の範囲が広い。

しかも、ものすごくハイセンスな世界に入った気がして尚人は昂揚した。

そこへ茂手木が登場した。

グレーのトレンチコートを羽織り、同色のボルサリーノをかぶっている。

こんなしゃれた格好をしている日本人、見たことない。尚人は目

を丸くした。

「きみが穂芝くん？」

茂手木は脱いだ帽子とコートを畠中に手渡しながら、甲高い声で訊いた。

三つ揃いのスーツもネクタイも、気のせいかすごく高そうに見える。

三十九歳と聞いたが、髪はすでに白髪混じりで、細面の鋭い目つきもあいまって、いかめしい感じがした。

「はい」

「そう。この仕事には慣れてるって？」

「はい、バイトですけど二、三年やってました」

「すぐに来てもらえるのかな？」

一瞬、つまつた。

会社の規定だと、退職願の届出は一カ月前だ。

答えを待たずにパソコンを開いて操作していた茂手木は、わずかな沈黙も許さなかった。

椅子をまわして尚人に向き直ると、

「他にも候補者がいるんだよ。悪いけど悠長に考えてもらう時間はあげられないんだ。やるか、やらないか、今決めてくれ」

眼鏡の奥の目が、気の立った鶏のように見えた。

尚人はビビった。

すると、その目がたちまち羊のように和らいだ。

「きみは漫画家志望だそうだね」

「は、はい」

「僕に付いて来れば、必ず今よりはレベルアップした人間になれるよ。ただし、時間がかかるし苦労も多い。夢はあっても才能がない、なにより努力できない人間は、僕のほうがお断りだ。今、感じた感じでは、きみにはなにかがある。だから、きみにその気があるんなら、採用したい。だけど、きみが努力できる人間かどうかまで、こんな短時間では僕には見抜けない。決めるのは、きみだ」

茂手木はデスクにゆったりともたれて、微笑を浮かべて尚人を見つめた。

「お世話になります。だけど、まだ会社になにも言っていないので、筋だけは通したいんですけど」

「いいね、その言葉。筋を通す」茂手木は頷くと、くるつと背中を向けてパソコンに戻った。そして、「できるだけ早くね。詳しいことは畠中に教えてもらって」と言った。

## 12・漫画の鬼(2)

尚人は飛び立つ思いで、詩史に連絡した。

急ぎの相談があると言うと、

「いいよ、うちにおいで」と答えた。

いきなり退職させて欲しいと言うのは気後れしたし、反応が怖くもあったが、まさか殺されはしないだろう。

尚人は覚悟を決め、とはいえ殆んど目をつぶって一気に、やりたい仕事のオファーがあったと詳細を告げた。

詩史は黙って聞いた。

尚人が喋り終わると溜息をついて、ちょっと笑った。

「フツクン、本当にそうしたいのね」

「はい」

すると立ち上がって、便箋とボールペンを持ってきた。

「退職願、書きなさい。あとはわたしが処理しとくから」

「いいんですか？」

あまりにあっさり承諾され、どんな顔をしているのかわからない。

「だって、早く行かないと他の人に取られちゃうんでしょ」

「らしいです」

「だったら、行かずに済ませられる？」

「いいえ」

「じゃ、そうしなさい。わたしがフツクンのチャンスをつぶしたって、一生恨まれるの嫌なもの」

ああ、そういうことか。

その答えで納得した。

どうせ僕は、ただの会社のおもちゃだしな。

自分勝手な詩史にも、いいところはあるってことだ。

尚人はすすいと事が運ぶことに興奮して、大はしゃぎで退職願を書いた。

翌日から、茂手木の仕事場へ行った。

初日は畠中がついて、コーヒーの淹れ方から電話の取り方、茂手木ご用達の店のリストなどをこと細かく教えてくれた。

住宅街は環境はいいがレストランもコンビニもない。

いったん事務所に入ったら外に出られないので、自分の食べ物ばかりのうちに調達しておくことと言われた。

ただし、茂手木は安っぽいものは食べないから、時間が近づいたらご用達の店まで買いに行かなければならない。

そのために使う自転車がガレージにある。

「カスタムメイドの恰好いいのだから、盗まれないように気をつけてな」

茂手木は離婚しており、身の回りの世話をする人がいないので、洗濯はアシスタントの仕事だ。

下着類は洗濯機で洗い、それ以外のものはクリーニングに出すこと。

コーヒーは絶やさないようにする。

メモパッドからトイレレットペーパーまで、すべての日用品の管理をきっちりと。

トイレの掃除も小まめに。

「……で、これが仕事？」と当然訊いた。

「そう。アシスタントは女房役つてわけ。あ、ちゃんと漫画家らしい仕事もあるよ。情報集め。茂手木さんに指示されたら、一時間以内に揃えるようにね」

畠中はニコニコしている。

「僕の携帯番号覚えておくから、分からないことがあったら電話して。茂手木さん、仕事中に話しかけると爆発するから」

「えー！」

尚人がたじろぐと、なぜか畠中はますます嬉しそうに笑み崩れ、「茂手木さん、厳しいよー。根性叩き直してもらってね」と言うではないか。

それに加えて、

「いい勉強になるよ。それは確か。僕なんか、いろいろ教えられたよ。で、卒業するわけ。きみ、頑張ってるね。じゃね」

畠中は、あんぐり口を開けている尚人を残してパツと去って行った。

そして、十一時きっかりに茂手木が出勤してきた。

ハンチングに革ジャン、カシミアのマフラーをなびかせて部屋に入るなり、

「加湿器！」と怒鳴った。

「へ？」



「冬は加湿器をつけるんだよ。僕が来るまでに室温二十三度、湿度六十パーセントにしておくこと。聞いてるだろうがー。ちゃんとやれ！」

「いや、でも……」

「言い返すな！」

い、いきなりのフルスロットルである。

茂手木は押し殺した声で命じると、尚人に帽子と革ジャンとマフラーを突きつけた。

思わず抱き取った尚人を睨みつけ、

「クローゼットにきちんとしまえよ。綿ゴミひとつ付けるんじゃない。いいな」と猛禽類の目をして言った。

尚人は怖じ気づき、その視線から逃れるために急いでクローゼットに走った。

背後からサブちゃんの『帰ろかな』が襲いかかって来た。

尚人の地獄の黙示録はこうして始まった。

茂手木はパワフルだった。

そばにいと、ものすごい圧迫感がある。

いつもピリピリしており、電話や来客などに答えるときには平静な口調を保っているが、尚人に向ける声は常に怒気をはらんでいた。言われたことには、即対応。

言い訳、反論、一切無用。

一週間で、尚人は疲れ果てた。

### 13・漫画の鬼(3)

「俺の言うことを聞き、俺のすることを見ている。それが全部、勉強だ。自分を真っ白にして、俺の思考パターンをコピーしろ。そうしたら、おまえは一人前の漫画家になれる」

そう言われた。

自分を真っ白にする。それはどういうことか。

「今は自分で考えようとするな」と茂手木は言うのだ。「俺の考えを吸収するんだ。そう努力しろ」

言い訳も反論もする暇はなかった。

茂手木の要求は分刻みだ。

そのどれもが、仕事に関係のない日常の些末事だった。考えることも出来なくなった。

買物、レストランの予約、宅配便の梱包、コーヒーの用意、ブラインドの掃除、原稿のコピー、ファックス、ファイル綴じ、郵便物の整理……。

コピーやファイルをしながら原稿を見る余裕があれば勉強になるのだろうが、できなかつた。

集中力は、茂手木に向けていなければならぬ。

なにか言われたときに、すぐに反応するためだ。

「俺のアシスタントをやるからには、俺の気分に敏感になれ。俺を怒らせたなら仕事の能率が悪くなる。そうなったら飯の食い上げだ。こんな風に言うと、自分のことしか考えてないように思うだろうが、これは穂芝のために言ってるんだぞ。秀吉は信長の要求を先読みし

た。その能力があつたから、太閤にまで出世したんだ」

茂手木の信長気取りに鼻白む心のゆとりは、とうに失われていた。感情が顔に出がちな尚人だったのに、茂手木を前にすると、言いつけられたことに無表情に「はい」と答えるのが精一杯だった。

出版社の人が来たのでコーヒーを出しながら軽い会話を交わしたら、あとで茂手木に酷く叱責された。

「気楽に口をきくな。失礼だぞ」

失礼もなにも、茂手木は客に尚人を紹介したことがなかった。出版社の人から電話がかかると、打ち合わせをするからと外に出るに行く。

まるで自分の人脈に、他人が入らないよう囲い込んでいるようだ。

金曜の夜に、夕食と一緒に食べようと連れ出された。

色っぽい女将が切り盛りしている小料理屋だ。

小上がりで酒を注いでくれたが、注文は一人で決めていた。

「俺が厳しいんで驚いたか？」

いつもよりは優しげな声だ。

尚人は目を伏せて、コクンと頷いた。

「俺も、こうやって育てられた。先生は鬼みたいなやつで、殺してやろうと何度も思った。でも、頑張つて今の俺になった。俺が欲しいのは、もう一人の俺なんだ。おまえが自分を殺して、もう一人の俺になれば、その時にわかるよ。ああ、茂手木さんの言うとおりにしておいてよかったとな」

自分を殺す。

それが、夢を叶える方法なのか。

だが、実際にプロとして働いている茂手木を前にすると、半人前の尚人には返す言葉がない。

茂手木は有名な漫画家や構成作家などの名前を挙げた。

彼らは茂手木に心酔し、茂手木の依頼なら断らないというほど目をかけてくれる。

おまえがもう一人の俺になれば、おまえもそこまでの存在になるってことなんだぜ。

でも、くじけたら、おまえはこの先、何者にもなれない。

酔った茂手木は上機嫌で自説と自慢話を繰り広げ、サブちゃんの歌を熱唱した。

土曜も日曜も、尚人はただ横たわって過ごした。

頭の芯が冷え切って、熟睡できない。

月曜日の朝は、身体全体が重かった。

『仕事に行きたくない』

でも、行かなければ何者にもなれないという茂手木の脅しが頭に響いた。

次の一週間も、茂手木の命令に従って過ごした。

腹がキリキリ痛み出したので、茂手木が出張で早く事務所を出た金曜日の夕方、医者に行った。

内視鏡診断をしようと言われた。

画像を見た医者は、

「出血してるよ。なんか、あったの？」と気楽な声で言った。

投薬治療で様子を見ようと帰されたが、尚人はすっかり暗くなっ

た。  
胃壁が血を流している。

でも逃げ出したら、本当のダメ男になる。  
どうしたら、いいんだ……。

部屋に戻り、布団に倒れ込んだ。

『考えるな、頭を真っ白にしろ』と茂手木の声がする。  
その通りにした。

『己を殺せ』と。

自分の部屋にいるのに息苦しくて堪らない。

これが絶望というものなのか。

というより感情そのものがなくなってきたような気がした。

そのとき、携帯が鳴った。

一瞬躊躇したが携帯に出た。

「フックン、げんきー？」

安西詩史の脳天気な声が耳の中で弾んだ。

#### 14 姐御肌は肌理細か？(1)

6 姐御肌は肌理細か？

「へんしゅーちゅー」

我知らず、泣き声に近かった。

「どしたの、フツクン。具合、悪いの？」

「……悪い、です」

「じゃあ、寝てなさい。元気になったら、また掛け直すわ。じゃ…  
…」

「ま、待つてください」思わず、とりすがった。「編集長、相談してもいいですか」

「いいわよ。うちにいるから、すぐおいで」

ふつと、力が湧いた。

尚人は布団の上に取り直った。

「行きます」

「あつ、ちよつと待って、フツクン」

「はい……」

「悪いんだけど、こっちの駅に着いて、もし“お姫様”を見かけたら、連れて帰ってくれない？」

「はい」

リーフィのことだとすぐに分かったが、なにがあったのか、今は

理由を聞く気になれなかった。

顔を洗い、髭を剃り、着替えて部屋を出た。

考えてみたら、この一週間というもの、茂手木以外の人間とろくに会話をしていない。

そういえば外気もろくに吸っていない気がする。

心が一酸化炭素中毒を起こしていたのだ。

先方の駅に着いた。

改札を通り過ぎたところで、意外と簡単にリーフイを見つけるところができた。

それは彼女が百八十センチの長身だからではない。

証明写真を撮るボックスの下から、派手なレース柄のスカートとストッキング、そして真っ赤な靴が見えていたからだ。

それでも人違いだとまずいので、尚人はカーテン越しに声を掛けた。

「リーフイ……リーフイ？」

「フツクン？」

聞き覚えのある声の中から聞こえた。

「開けていい？」

と言い終わるや否や、リーフイがカーテンを引いた。

腰掛に座って正面を見ていた。

だが、お金を入れて写真を撮っている様子もない。

「なにしてるの？」と訊くと、リーフイは首を左右に振った。「帰ろう、リーフイ。ゴーイング、マイホーム」

「ノー、マイホーム」

と応えたリーフイは、あそこは詩史の家だと言った。

それはそうだが……ははーんと尚人は頷いた。  
「リーファイ、詩史さんに叱られたね」

それには何も答えなかったが、尚人の差し出す手を掴んで箱から出て来た。

途端にあたりの視線という視線が、一斉にこちらに向いたような気がして、尚人はより意気消沈する。

今の僕はこんなハデハデな気分ではない。

仕事にも、人生にさえも悩んでいるというのに。

この香港娘は、とうとう詩史に叱られてしょげていたのか。

マンションに着くと、詩史はリーファイに部屋に居るように言った。そして、尚人の顔をまじまじと見るなり、眉をひそめた。

「フツクン、死相が出る」

気付いてくれた。そう感じた。

茂手木は、尚人の表情や様子についてコメントしたことがなかった。  
見ていないのだ。

リビングに向かい合って座った途端、堰<sup>せき</sup>が切れたように茂手木との一週間を洗いざらい話した。

いじめられたことを母親に訴える子供みたいだなと自分で思ったが、詩史は年長者だ。疑似母親にしても、おかしくない。

そのことが初めて有り難く思えた。

聞き終えると、詩史はわりに平靜な様子で頷いた。

「そういう人間、よくいるよ。自分のこと、特別な人間だって人に見せるのに夢中になってるやつ。ある程度の力はあるから、仕事は



できる。だけど、人を育てる力はないよ。だから、そばにいても、いいことにはならないと思う」

そのようにすつと言い切られて、尚人は目をパチクリさせた。

「じゃ、逃げ出してもいいんですか。逃げたら僕の将来はない、みたいな言い方されたんですけど」

「そりゃあ、そういう人間にとって、言うことを聞かない輩は脅威だもの。言葉だけでもめちゃくちゃに踏みつけてやらないと、気がすまないでしょうよ。だけど、考えてみて。人の個性を否定して、自分そっくりになれなんて平気で言う傲慢な人間が本当の一流だと思う？　そういう人を尊敬できるかな。人間って、尊敬できる人からしか学べないものだと思うわない？」

尚人は頷いた。

「その男は、勘違いしてると思う。そういう奴は、一人で頑張らせなさい。フツクンは苦労しても漫画家になりたいかもしれないけど、仕事ってなんであれ、苦しいばかりじゃ、やってられないよ」

「そう思いたいけど……僕、苦しいことから逃げてばかりいるから」

かつて恋人だった女の子の顔が浮かんだ。

尚人はうな垂れた。

茂手木の毒気は凄まじい。

おのれを殺せと、たった一週間言われ続けただけで、すっかり自信がなくなった。

すると詩史の右手が伸びて、落ちる一方の尚人の肩を叩いた。

## 15・姐御肌は肌理細か？（2）

「フツクン、わたしに相談持ちかけたってことは、わたしの意見が聞きたいってことよね」

また尚人は頷いた。

本当は誰でもよかったのかもしれない。

崖っぷちに立ったとき、たまたま電話をかけてきたのが詩史だったのだ。

でも確かに、尚人は詩史にすぎた。

「わたしのほうが歳の分だけ、フツクンよりたくさん、いろいろな人を見てきてる。だから言うわよ。その男のところまで働くの辞めたって、悪いことはなにも起こらない。あんたにはまだ先があるの。それなのに、自分を殺しちゃダメ！」

「ケツまくっても、いいですよね」

「まくれ、まくれ！ おまえなんか大っ嫌いだって、言ってやれ！」

おまえなんか、大っ嫌いだあ！

それはまさに尚人の言いたいことだ。頭の中で繰り返すだけで、すつとした。詩史は満足そうに、うんうんと頷いた。

「フツクンは、すぐ顔に出るんだから」

ああ、僕、今、笑ったんだ。

すっごい、久しぶりだ。

「詩史さん」

詩史がちよつと驚いた顔で尚人を見た。

勝手にフックンと呼ばれつづけてきた腹いせに、今まで心の中で使っていた呼び方が思わず口から出たのだった。

「なに？」

「トイレ借りていいですか？」

「いいわよ」

尚人はトイレに入ると、閉じてある便座にそのまま座り込んだ。

昨日までを思い返した。

ある意味、茂手木も凄い人だ。

人から笑いを奪うなんて。

あんな風で、友達いるんだろうか。

恋人、いるんだろうか。

まあ、いいや。

僕は、もう付き合わないぞ。

両の拳をギュッと握りしめてから立ち上がった。

トイレから出ると、尚人は両手を天に突き上げて深呼吸した。

「あーあー、またフリーターに逆戻りかあ」

明るい気分で言ったのだが、詩史が思いがけない反応をした。

「うちに戻ればいいじゃない。絵を描くより目立たないけど、医薬品市場の生の声を開発や宣伝戦略に反映させるんだ。その気になつて頑張つて、結果に結び付けられれば、それはずっとダイナミックだと思うよ」

驚いて見ると、詩史はソファアに座って悠々とお茶を飲んでいる。そして、からかうような目つきで尚人を見上げた。

「嫌なら、いいけど」

「いや、それは」尚人はなんとなく姿勢を正し、詩史の正面に座り直した。膝を揃えて、恐縮の姿勢をとる。「そうさせてもらえたら嬉しいけど」

「じゃ、そうしよう」

「でも、詩史さん。簡単に言うけど、退職したばかりで舞い戻るのが、かっこ悪いですよね」

「大丈夫。フックンは病気で倒れたお爺ちゃんの介護を手伝うんで、しばらく休暇とってたって言うてあるから」

え？ どういうことが分からない。

詩史はワザとらしく目をパチパチさせている。

あー、このおもねるような可愛い子ぶりっこ。

なにか、ごまかそうとしてるような。

「えっとね。退職願、預かったのはいいけど、やっぱりわたしの独断でって、まずいかなって……。フックンが出社しなくなって騒ぎになりかけたときに、とっさにそういうことにしちゃったわけ」

「え？ 会社には出してないんですか？」

「シヨウユコこと」と、またワザとらしく目をパチクリ。「で、折り

を見てさ、介護してたお爺ちゃんの状態が悪化して、仕事に戻れなくなっただからって、わたしにこれを送ってきましたと、預かってた退職願を出そうと思ったわけ。いい考えでしょ」

尚人は返事に困ったが、答えを取りつくろう必要はなかった。

詩史が「エヘ」と舌を出したのだ。

「ところが、あの退職願、失くしちゃったのよー」

尚人は相変わらず無言のまま詩史を見つめた。

「ここんどこ、古い書類とか衣類とか処分してるんだけど、その中に紛れちゃったらしくて。だから、もう一度書いてもらおうと思っ  
て」

「え？ それで、きょう電話くれたんですか」

「シヨウユこと」

詩史はニツコリ笑った。

私生活のない女は、秘密と嘘が苦手だ。

だったら真っ正直にありのままを、さらけ出して行けばいいものを。

見栄えよく誤魔化そうとするから、すんなり収束するはずのことまでゴタつかせ、結果的にまわりまわってトラブルの発生源になってしまう。

尚人はあきれぬより先に、感心してしまった。

賢者のようなことを言う一方で、妙に間抜けなことをするんだもの。

## 16 姐御肌は肌理細か？（最終話）

「よかった、よかった。じゃ、ご飯食べに行こっ」

お、待ってました。「はい」

「でも、まだ時間あるな。ちょうどよかった。古着が山ほどあって売りたいんだけど、持ち込みじゃないと店が引き取ってくれないのよ。車に詰め込めばいいんだけど、あいにく運転手が都合つかなくて困ってたんだ。フックン、免許証持って来てるよね」

やっぱりな、と尚人は納得した。

やり方は違っても、詩史も茂手木も他人を思いどおりにしようとする暴君だ。

だが、詩史には文句が言える。

当てこすりも、愚痴も、批判も言える。

なにより、冗談が言える。

一緒に笑える。感情のおもむくままに。

これはもしかしたら、たいした違いなのかも知れないと思った。

ジャケットをはおった詩史は、

「リーファイ！ ちょっと出かけてくる。一時間くらいかな」と声をかけた。

「イエース！」

リーファイはドアを開けて手を振って見せた。

「ちょっと待ってなさい。帰ったら三人で食べに行こー！」

詩史の言葉にリーフィは頷いた。

このくらいの日本語なら分かるようになったらしい。

古着屋に運ぶ衣類は段ボール五箱分もあった。

ほとんどが別れた男の影響で買った服だそうで、袖をおしてないものが多いんだと、詩史は車中でベラベラ喋った。

「わたし、懲りないんだよな、これが。困っちゃう。たとえばね…」

そして、思い出話がつづく。

運転の傍ら、つけっぱなしのラジオでも聞くように受け流しながら、尚人は思う。

トラブルというのは、被害をもたらすばかりじゃない。

その結果から得るものだって大きいはずだ。

詩史が引き起こすトラブルにも、そんなところがあるんだろう。

「でも、よかった!」と詩史が大声で言った。「もう退職願、いらないよね。めでたし、めでたし」

上機嫌だった。

ものすごく年上ではあるけれど、ちょっと言ってやりたくなかった。

「詩史さん、そういう、その場しのぎのへたな小細工、悪い癖ですよ…」

「いいじゃない。結果オーライよ。それとも真相を告白する？ 漫画家にしてやるって甘い話に乗せられて、奴隷にされかけて泣き泣き逃げて来たって」

げっ、反撃には流石に一日の長がある。

「こっ、この場合は確かに結果オーライですけど」

「ただし！」と詩史。「ひとつ条件があるの」

「まただ。やっぱり、そんなに甘くはないと思った。」

助手席の詩史が、互いの肌が触れ合うほど、にじり寄り寄って来た。尚人は目を丸くして、相手をちら見した。

「わたしの男になりなさい」

「ええー！」

「なんでー！」

「そうなるの？」

尚人は光速の視線で、詩史の顔と胸とを交互に見た。

胸を張り出し、腕組みしていた詩史が、尚人の片手を掴むと引き寄せた。

「危ないですって！ 詩史さん！」

掴まれた手が、詩史の胸の横に持つていかれた。

「ちょっとだけ、詩史の胸の柔らかさを初めて実感した。だが、  
「うっそ、よん」と詩史は手を放した。「リーフィのことよ」

「ああ……あの子のことか。」

「だけど、今のはさすがに驚いた。」

「このご時勢、職を得るためには、この身も捧げる気になりかけた  
もんな。」



「休日は外に連れ出して、どこかで夜まで遊んで来て欲しいんだけど……どお、出来る？」

尚人はゆつくりと頷いて見せた。

「もう少しで、あの子も国に帰るから。それまで、フックン、よろしくね」

茂手木の相手をすることに比べたら、お安い御用だった。

茂手木とは縁切りだ。

自分の意志で、あの男を人生から追い払うんだ。

もう苦しめられることはない。

そう思っただけで、重荷が全部消え去った。

なんだか台風一過の青い空の下を走っているような気がした。腹がきゅるつと鳴った。

「腹へったあ」

「そうか、よしっ、食べに行こか！」と詩史。「この前の中華料理屋へ、レッツラ、ゴー！」

「はい！ ……いやいや、拙いです。リーフイ、連れて行かなきゃ」

「あ、忘れてた！」

「ひつどいなあ、たった今、話してたところなのに」

詩史が笑った。

尚人はハンドルを握ったままで、思いきり背筋を伸ばした。

すると、それを見た詩史が今度は小さく笑って、尚人の膝をポンと叩いた。

ふたりは目を見合わせて笑った。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4466i/>

---

女系職場で上手くやっていく方法

2010年10月10日14時43分発行